日本語史とは何か

―言語を階層的な資源と見る立場から―

金水　敏

【キーワード】
日本語史　比較言語学　語彙史　標準語／共通語　役割語

【要旨】
言語およびその要素は資源として見ることができる。またその資源は一様ではなく、獲得・学習の段階によって〈子どもの言語〉〈地域の言語〉〈広域言語〉等に分けられる。このような見方から言語史を見直した場合、無意識的・無選別的変化と意識的・選別的変化の区別が重要であり、前者の変化は主として〈子どもの言語〉に関わり、後者は〈地域の言語〉〈広域言語〉に関わることを示す。また日本語の標準語／共通語の特殊性や役割語についてもこの枠組みの中で捉え直すことができる。

１．階層的な言語資源

日本語の歴史とは何か、ということを考えた場合、そこにはかなり異質なものが含まれている。例えば語彙史について考えたとき、教育の問題を無視することはできない（cf. 小野 2010）。一方で比較言語学の対象となるような音声・音韻の現象は、教育や政治・社会とはまったく無関係とは言えないまでも、むしろそのような影響を排除したところで成立する問題であると言える。

日本語のみならず言語の歴史というものを考える上で、言語を一様のものと考えず、そこに性質の異なる複数の階層が存在すると考えることを提案したい。また、言語およびその要素を、コストをかけて手に入れ、また手に入れた言語を用いて何らかのベネフィットを得ることができるような、“資源”として捉えたい。

言語資源は 3 つないし 4 つの階層に分けられる。一つは子どもが生まれて最初に獲得する第一言語、すなわち“母語”である。ここには、基本語彙と基本的な文法の情報が含まれる。これは基本的に音声言語である（手話は音声言語に準じるとしておく）。これを〈子どもの言語〉と名付けておく。

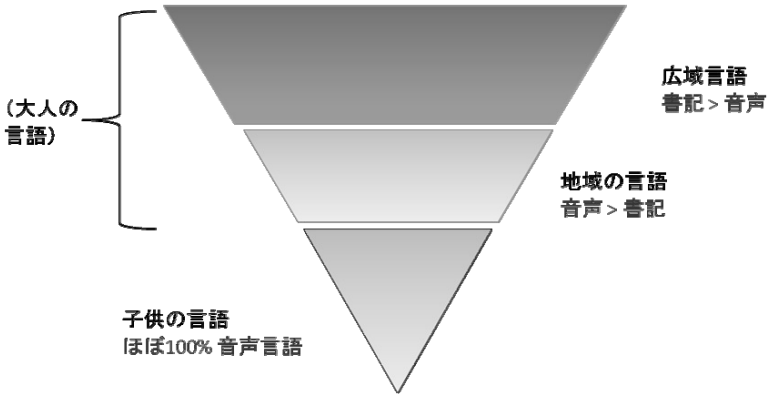
次にやがて子どもが成長し、地域社会に編入されていく過程で、様々な言語変種を身につけていく。この言語変種とは使用場面に応じて使い分けるスタイルの変種（例えば敬語など）や、話者の社会的グループによって異なる話し方の違いなどで、自分自身が用いるものもあれば理解言語に留まって使用言語とはならないものも含まれる。なお日本で生活している場合はこの言語変種とは文字どおり日本語のヴァリエーションに収まるであろうが、世界の様々な言語状況（あるいは日本においても過去の状況）に鑑みて、母語とはまったく異なる言語を身につけることを迫られる場合も少なくないのである。また言語変種は音韻、語彙、文法等を知識として身につけるだけでなく、適切な場面で適切な変種を使用するという語用論的ルールを同時に学ばなければ役に立たない。このような言語変種を身につけて使いこなすということが即ち言語が“大人”化していくということであると考える。この段階を〈地域の言語〉と呼んでおく。〈地域の言語〉は音声言語が基本であり、一部に書記言語（文字言語）を含むものとする。いわゆる方言は〈子どもの言語〉〈地域の言語〉のレベルの言語である。

ここで、“子ども”“大人”という用語を用いているが、これは象徴的な意味であり、何歳まで子ども、それ以上は大人というような厳密な境界があるわけではない。例えば学齢に達する以前からある種のスタイルの習得や使い分けは始まっているし、また大人になって習得されるような基礎語彙も存在するであろう。むしろ〈子どもの言語〉とは無意識的、無選別的に獲得される言語と捉えて、それを身につける実年齢とは緩やかな相関を持つくらいに捉えておきたい。

音声言語による地域のコミュニケーションの範囲を超えて、行政、司法、産業、医療等、知的な情報を扱う言語のレベルを〈広域言語〉と呼ぶ。水村（2008）の言う「国語」にほぼ相当する。このレベルでは書記言語が主体となり、音声言語がこれに従属する。〈広域言語〉は孤立して存在するのではなく、一般に〈グローバルな言語〉あるいは〈超広域言語〉とも言うべき“外のことば”との交流（翻訳）によって成長する。〈グローバルな言語〉とは現在の世界的な状況では間違いなく英語が該当するが、近世以前の東アジアでは〈超広域言語〉として古典中国語（漢文）がその位置を占めていた。また中世ヨーロッパではラテン語がこれに該当する。

以上の階層を図式化したものが【図 1】である。これは個人の持つ言語資源が成長していくイメージで示したもので、〈子どもの言語〉の上に〈地域の言語〉が積み重なり、さらにその上に〈広域言語〉が積み上げられるという様子を描いている。

【図 1】



２．言語史と言語の階層

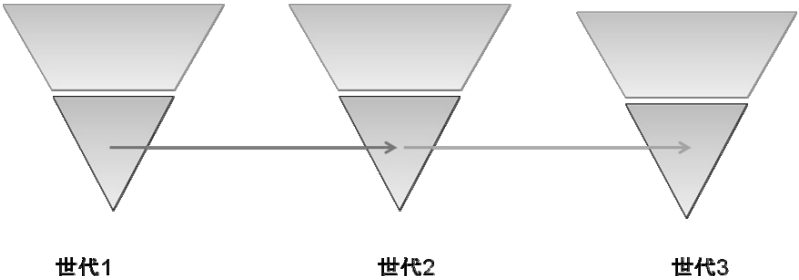
言語学の世界でもっともよく知られている歴史的研究は比較言語学である。ここで扱われる現象は音韻対応であり、同系と仮定される 2 言語の比較から、その共通の祖語の状態を推定するという方法を取る。19 世紀末から 20 世紀にかけてヨーロッパで大いに発展し、いわゆる印欧祖語の探求が進められたことはよく知られているが、日本語に関連して信頼度の高い比較研究としては日琉祖語の研究が挙げられる。古くは服部四郎の一連の研究（服部 1978-1979）が挙げられるが、近年では Thomas Pellard の研究（Pellard 2008; 2010）が目覚ましい。ここで扱われているような音韻変化(例えば日琉祖語の*o と*u が上代日本語で u に合流することなど）は、発話者の意識によって選別されるような種類のものとは言えない。気づいてみたら変わっていたと分かるような種類のもので、無意識的・無選別的な変化と言いうる。このような変化が果たして子どもの時代に起こるのかどうかは実証されていないが、無意識的という意味で〈子どもの言語〉の変化であると考えておこう。ただし、もしこのような変化が共同体の中で気づかれ、変化を起こした話者（グループ）と起こしていない話者（グループ）が社会的に分化し、言語変種として捉えられると、意識的な選別の対象ともなり、〈地域の言語〉の一部をなす。

一方で、基礎語彙ではない文化的な語彙はその使用価値によって意識的に選別される。例えば類義語としての「てじな（手品)」「奇術」「マジック」について考えてみよう。江戸時代、「てじな」と「奇術」は同

時代語として存在していたが、「てじな」が一般語彙として普及していた一方で、「奇術」は一部の知識人が漢文脈の中で使用する語であった。しかし明治時代になって翻訳語彙が漢語として広く用いられるようになると、「奇術」がより現代的ないいイメージを持つ語として一般に用いられるようになり、相対的に「てじな」はやや旧弊なイメージを持つ語と見られるようになった。さらに戦後、外来語（カタカナ語）が流行すると、「マジック」が一般化し、相対的に「奇術」もまた古くて固い印象を与える語となった。この例に典型的に見られるように、語彙の変遷においては時代背景としての文化状況が大きく影響を与えるのであり、また社会における人々の価値付けや選好が強く関与していることが分かる。

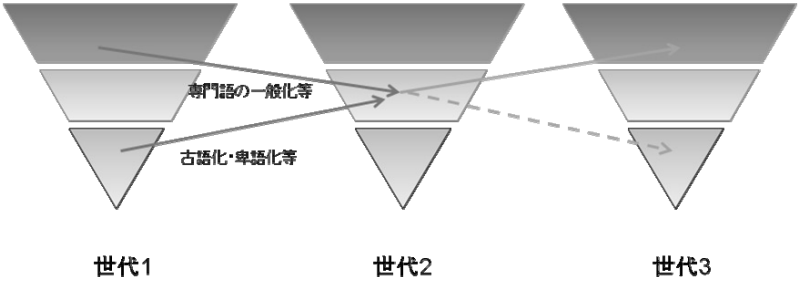
以上のような言語史の違いを、階層的な言語観に当てはめて考えてみよう。〈子どもの言語〉を無意識・無選別的な言語と読み替えた場合、比較言語学の対象となるような言語変化とは、ある世代の〈子どもの言語〉が次の世代の〈子どもの言語〉へと受け継がれる際の変質であると位置づけられる。その要因はなんらかの生理的、認知的バイアスあるいは傾向として説明できるかもしれないが、いずれにしても意識的・選別的なものではない（**【図 2】**参照）。

【図 2】



一方で、例えば「奇術」や「マジック」がたどった道筋を考えてみると、いずれも外の言語としての〈超広域言語〉から翻訳を通して〈広域言語〉にもたらされ、それがやがて音声言語としての〈地域の言語〉にまで降りていった事例と考えることができる。これ以外に、例えばある世代の〈子どもの言語〉が古語や卑語となって〈地域の言語〉の一言語変種となる場合もあろう（例「くそ」が基礎語彙から卑語化した例など。**【図 3】**参照）。

【図 3】



以上、言語変化を無意識的・無選別的なものと、意識的・選別的なものとに分け、前者は〈子どもの言語〉に起こる変化であり、後者は〈地域の言語〉あるいは〈広域言語〉に関わる変化であることを述べた。前者の例として音韻変化を例に取ったが、基本的な統語構造の変化や動詞活用など形態変化もここに入るであろう。一方で、後者の例として語彙変化を取り上げたが、他に文体史や、敬語など語用論的な問題の歴史的変化がここに含まれるだろう。しかしながら両者の交渉的な問題も十分あり得るのであり、さらなる検討が必要である。

３．標準語／共通語と日本語史

現在、標準語あるいは共通語が書記言語・音声言語にまたがって“正しい”日本語として広く認識され、話し言葉における標準語化・共通語化が進むことにより、多くの伝統方言が消滅の危機に瀕している。このような状況は日本語の歴史の中ではここ100年余りの間に急激に進んだ状況であり、世界的に見ても決してありふれた状況とは言えない。

江戸時代以前には、〈広域言語〉すなわち標準的な書記言語として漢文あるいは候文が存在し、音声言語としては、各地域・身分に応じた方言が個々に存在していた。音声言語の標準化という発想は近代になるまで存在しなかったと言える（ただし演劇・演芸や心学道話、また戯作等によって事実上の標準的な音声言語が準備されていたことには注意。森岡 1991、野村 2011 等）。

近代になって、教育、産業、軍事等における効率化の観点から、国語改良の発想が生まれ、書記言語のみならず音声言語にも及ぶ、国語としての標準化が図られた。即ち言文一致運動である。しかし、標準的な言＝音声言語自体が定まっていない時点で、政府主導では言文一致は進まず、結局、小説改良運動が主導する形で明治末年から大正時代にかけて

ほぼ完成することとなった。しかし、あらゆる文書が言文一致になった訳ではなく、例えば法令文書は第 2 次世界大戦後までは文語体のままであったし、改まった手紙文などは候文のままであった。

ともあれ、言文一致体が東京山の手の知識人層の言葉をもとにして成立したのと相前後して、音声言語の標準語化が教育界で進められた。それは「方言は汚い言葉である」というテーゼのもと、方言撲滅運動として展開された。このキャンペーンの結果、国語＝標準語という唯一正しい音声言語が存在し、かつそれは書記言語と連続的である（言文一致）という理念が成立したのである。国語史とは、すなわちこの近代国語にいたる物語であるという了解が同時に生じた。

言文一致・標準語確立以後の状況を、階層的な言語観に当てはめるならば、次のように考えられる。〈広域言語〉の中核に、書記言語としての口語文体が位置するが、これはあくまで書記言語が中心であり、音声言語はこれに付随する。例えば「～である」という断定表現はあくまで書記言語の文体の一部であり、音声言語には本来ない形式である。一方で、音声言語としての共通語が〈地域の言語〉における一言語変種として広い地域に存在している。またこれとは別に、首都圏では首都圏方言があり、〈子どもの言語〉～〈地域の言語〉として存在する訳であるが、首都圏方言と共通語は当然多くの共通部分を持つので、話者の意識のなかで十分分離されていないとしても不審はない。

４．役割語の発達と言語史

「役割語」とは、主として特定の社会的グループが共通に用いると広く考えられているステレオタイプ的な話し方の変種である。これは、話し方を現実の「位相（差)」として見るのでなく、人々が共通に持つ知識の問題として見る見方であり、現実の話し方と近い場合もあれば遠い場合もある。例えば「わしは～じゃ。」のような話し方をすると、日本で育った多くの日本語話者は老人を想起する。これを仮に〈老人語〉と名付ける。しかし、現実には、老人になると〈老人語〉を使用するようになるという事実は存在しない。一方で、「おれは～だ」のような言い方は〈男ことば〉であり、「あたしは～よ」のような言い方は〈女ことば〉であるということについて多くの日本語話者は同意するであろう。たしかにそのように話す男女は存在し、これを現実の日本語の位相差と認めることはできるが、しかし同時に役割語として認めることも可能である。

実際のところ、上のように話す男女は確かに存在するとしても、そうではない男女も普通に存在する。特に、首都圏以外の地域ではそうであ

ろう。では、日本語話者は、実際の女性がいろいろな話し方をするのに、なぜ「あたしは～よ」をその中から女性語として選別することができるのであろうか。それは話し手が現実から直接帰納的に学び取ったのではなく、おそらく絵本やアニメ等の作品を通じて役割語として学び取ったからである。しかし、私たちはどの言語変種が現実に基づくものであり、どの言語変種がヴァーチャルな作品上のものであるかというような区別を必ずしもつけることは出来ない。現実の言語変種の知識と、役割語としての〈老人語〉や〈男ことば〉や〈女ことば〉の知識は話者の知識のなかで入り交じっていることの方が多い。即ち、役割語は、子どもが大人になる過程でさまざまな言語変種を学んでいく過程の中で、現実ではなく、作品を通じて学習される。厳密な意味で〈地域の言語〉とは言えないが、〈地域の言語〉と同レベルで多くの話者が共有する言語変種の知識であると規定できる。

では、役割語の成立・発達過程を歴史的に捉えるとどのようになるであろうか。ここでは〈老人語〉を例に採ろう（金水 2003: 第 1 章、金水・乾・渋谷 2008: 第 7 章)。老人語の起源は、18 世紀後半以降の江戸の町に求めることができる。当時、知識人層、富裕層階級の人々は多く上方語を話していたが、下層階級の人々を中心に江戸語が成立、次第に江戸の広い階層において用いられるようになっていった。その過程で、保守的な老人層が比較的上方語に近い話し方をし、革新的な若年層が新しい江戸語を話す傾向が強かったと想像される。その世代的な対立を誇張的に描いた作品が戯作や歌舞伎に存在する。すなわちこれらの作品を通して、上方風の話し方＝老人という図式が確立された。その後、大衆的な作品ではこの図式が踏襲され続け、今日の〈老人語〉につながっているのである。

ここでは、役割語が持つ保守的な性質がよく表れているが、このような保守性は書記言語一般が強く持つ性質である。一方で、役割語とはあくまで音声言語における話体の変種であると言わなければならない。すなわち役割語は、書記言語を通じて媒介、継承される音声言語の変種であるという二面性を持っていると考えられるのである。これは、標準語／共通語が書記言語と音声言語の二面性を持っていることと平行的に捉えられる一面を持つと言えよう。

５．まとめ

本稿では、言語を階層的な資源と見る見方から、日本語の歴史について性質の異なるものを分離することを提案した。すなわち、言語の変化には無意識的・無選別的なものと、意識的・選別的なものがあり、前者

は〈子どもの言語〉に、また後者は〈地域の言語〉また〈広域言語〉に関わるものであるとの見方を示した。また標準語／共通語の歴史的位置づけや、役割語の考え方についても述べた。

【参考文献】

小野正弘（2010）「国語語彙史における近代―広義と狭義と―」第 96 回国語語彙史研究会発表資料.

金水　敏（2007）「言と文の日本語史」『文学』第 8 巻・第 6 号（11, 12 月号）pp. 2–13, 岩波書店.

金水　敏・乾　善彦・渋谷勝己（共編著）(2008)『日本語史のインタフェース』シリーズ日本語史, 4 岩波書店.

金水　敏（2010a）「日本語の将来を考える視点―「言語資源論」の観点から―」日本学術会議主催公開講演会「日本語の将来」（主催 日本学術会議・言語系学会連合 後援 国立国語研究所）発表資料.

金水　敏（2010b）「写生（文）、言文一致体と子規・漱石」『松山坊っちゃん会会報』11: 1-3.

クルマス、フロリアン（著）諏訪功・菊池雅子・大谷弘道（訳）(1993)『ことばの経済学』大修館書店.

野村剛史（2011）『話し言葉の日本史』吉川弘文館

服部四郎（1978–1979）「日本祖語について（1-22)」『言語』7-1～7-3、7-6～8-12. 大修館書店.

水村美苗（2008）『日本語が亡びるとき―英語の世紀の中で―』筑摩書房.

森岡健二（編著）(1991)『近代語の成立　文体編』明治書院.

Pellard, Thomas (2009) *Ōgami: Éléments de description d'un parler du Sud des Ryūkyū*, École des hautes études en sciences socials. http://tel.archives-ouvertes.fr/tel-00444150/fr/

Pellard, Thomas (2010)「日琉祖語の母音について―比較音韻論の方法と実践―」ワークショップ「日本語音韻史の方法と実践」発表資料. 大阪大学.

―きんすい　さとし　大阪大学大学院教授―